

丈の高い草や低い草…

伝統地に多様性

6月中旬の木曾町開田高原。2年ごとに野焼きをする開田の伝統的管理の草地にアヤメの花が咲く。神戸大学大学院・生物多様性研究室の永田優子さん(25)は膝丈の草の中で

メの下ではアマドコロ、フタリシズカなど、中ほどの丈の草が花を咲かせ、地這(は)いキジムシロの花も見える。

そのまま春の火入れで灰になる。土壌のpH(水素イオン指数)が上がり、栄養分が増えて草丈が高くなるため、ススキなど丈の高い草が一気に育ち光を独り占めする状態だ。

一方、毎年の野焼きで管理する火入れのみの草地は、ススキやイタドリが1層前後の高さに勢いよく伸び、一見では他の草は見当たらない。大株のススキの陰に隠れて低い丈の草の花が咲くが弱々しい。ここでは草を採らないため、育った草は

2年ごとの野焼きの伝統地は、1年目は飼料として草を持ち出す。火入れ地より土壌pHは低く、草丈も低い。永田さんは「秋には草丈が伝統地で90センチ、火入れ地で150センチとなる。伝統地は光

をめぐる競争が緩やかで、丈の高い草、低い草など、植物の多様性が維持できるのでは」とみる。

昆虫を調査する同大学院の内田圭さん(32)は「チヨウの多様性は、その場所の花の多様性に影響される」と考えている。1地点のチヨウの数は5、6月の平均値で、火入れ地は約7個体4種、伝統地は約29個体12種と大差だ。「それぞれの草地に飛び交うチヨウの違いを見比べてみては」と内田さんは話す。

開田の草地



アヤメの咲く伝統的管理地。ススキも他の多様な植物と共存している

江戸時代の大馬主の家、県宝山下家住宅館長の加村金正さん(76)は、神戸大の調査を2年前から見守り、調査結果を楽しみにしている。山下家を訪れる人、馬とともに生きた開田の文化を語ってきた加村さん。「馬を飼っていた昭和30年代まで、里山は採草地が広がりにいろいろな花が咲いていた。草原は、春の火入れ、秋の草刈りと、馬を中心とする開田の生活サイクルの原風景」と少年時代を振り返る。(田澤佳子)